

教育課程編成委員会 第2回議事録

日時：2015年9月28日(月) 19時～20時

場所：15 教室

出席者： 三沢幸史氏 望月太敦氏 小檜山修平氏
八尾 勝氏 上松 剛氏 倉持有希子氏
欠席者： 白井幸久氏
列席者： 中浦俊一郎氏 林 恵子氏

I. 聖書日課 マタイによる福音書18章12節 林 恵子氏

聖書および解釈を朗読後、聖書日課の説明があった。下記の通りである。

聖書日課とは世界中のYMCAとYWCAでその日に読む聖書の箇所が決められており、日々の糧となっている。

II. 議事

議事に入る前に校長より、介護福祉士の資格制度を取り巻く最近の状況について下記の通り説明があった。

介護福祉士の資格取得ルートは、これまで①養成校卒業と同時に資格取得 ②実務経験3年と国家試験受験であったが、法律改正で①には国家試験がプラスされ、②には450時間の実務者研修がプラスされた(①②ともに平成28年度開始)。さらに今国会の法案の中に、①の国家試験受験が1年延期され、しかも自由選択制、また外国人の介護の就労ビザを認める法案が盛り込まれていたが、安保法案の審議に時間をとられ流れてしまった。このままていくと、現在介護福祉科の1年生は卒業時に国家試験が義務付けられることになる。この後の臨時国会や通常国会で法案が通れば状況が変わるかもしれないということで介護福祉士の資格取得の状況は不安定である。

1. 委員会の進め方の説明

八尾校長より議長の白井氏が本日欠席の為、代わりに八尾校長が議長を行うことの説明があった。

2. 部会に移動

八尾議長より、前回の話し合いの議事録が本日の資料として添付されているので、その議事録を基に話し合いをさらに深めて欲しいという説明後、介護福祉科と作業療法学科に分かれて部会が行われた。

3. 部会報告

作業療法学科 上松学科長

我々が学生の頃は教員を通してそれぞれが自分でOTを学んでいったが、今の学生は自分で考えるという経験をしていない。授業のシステムとして自分で調べて授業にのぞみ学んでゆくという

流れを作りたい。その中で自分で考えられる学生を育ててゆきたい。

他職種との連携が必要である。それを学ぶために企業のプロに教えてもらってはどうかという意見をいただいた。しかし学生のレベルとしては、その前段階の報告、連絡、相談ができていないという現状がある。それに関しては職場でも同様であり、枠組みを提示してトレーニングしているという報告が委員からあった。

介護福祉科 倉持学科長

前回の委員会でご意見をいただいた2点について学科の会議で取り上げた。

①障害領域の授業はどのようになっているのか？

②地域包括ケアについて学校としてはどのような対応を行っているのか？

①については以下の通りである。障害者の理解の授業を30コマ行っている。また現在は1年生の実習でほぼ全員が障害児者の施設に行っている。障害児者の施設へ就職している者もいる。授業時間を少しだけ増やしても系統立てた学びにはなりにくいので、学習支援演習（ホームルーム）の中でも学生達に伝えてゆきたい。

②については以下の通りである。居宅サービスについてもっと理解させたいが、なかなか利用者がOKを出してくれない状況がある。見学だけとか、短い日数だけでも可能になるよう、来年に向けて考えてゆきたい。望月委員からは地域福祉の取り組みとして、ある自主グループの活動が紹介され、このような自主グループをコーディネートする役割を介護福祉士ができるとうまいというご意見をいただいた。学生達のレベルを考えるとそこまで到達するのは難しい気もするが、今後少しずつ種をまきながら方向づけをしてゆきたい。

4. その他

八尾校長より学事暦の後半についての説明と、事務局より謝礼についての説明があった。

最後に八尾校長より、委員の皆様の貴重なご意見への感謝といただいたアドバイスを活かしてYMCAらしさを盛り込んだカリキュラム作りを進めてゆきたいとの挨拶の後、閉会となった。

記録 林 恵子

教育課程編成委員会

2015.09.28

19:20～19:50

介護福祉科作業部会

出席者：望月太敦氏 倉持 有希子氏（司会進行）

倉持（司会者）：前回の部会で提案された障害児者に関連する教授時間内容の充実、社会的に注目されている並びに地域包括ケアに関連する授業や実習の提案について、教員会議教員会議で話し合った内容を報告した。

倉持：障害児者関連については、授業時間を少しだけ増やしても系統立てた学びにはなりにくい。障害の種類、医学的知識、制度、生活支援等、様々な内容から全体のバランスを考えて授業の中に追加していきたい。

地域包括ケアについては、科目「社会の理解」で基本の学習をした後に、2年生の後期に科目「介護の基本」の中の地域福祉論において実践的な取り組みをしている。まずは、在宅実習を実習Ⅰで実践できるように整えていきたい。

望月：自分の学生時代は、高齢者中心の授業だったが、介護福祉士は高齢者に限定されるものではないので、授業としてやってもらいたい。

地域福祉ではある町での取り組みを紹介する。要介護になる前の人たちが自主グループを作り活動している。オカリナや体操を練習し、その成果をグループホーム等で発表している。そのような自主グループのをコーディネート役に介護福祉士は向いており、地域で活躍することもできると思う。

倉持：確かにそのような役割を担うことは専門性から考えて可能であるが、学校の学習の応用でもある。現状の学生の気質や学力でそこまで到達することは難しいと思うが、方向付けは必要と考える。

まとめ

委員の求めに対してただちに解決することは難しいが、前回の部会にもあるよう、少しずつ種をまきながら方向付けしていきたい。

<作業療法学科 部会>

上松 : 以下、前回までの話を踏まえて行っていること

○カリキュラムマップの作成

○実習について

・丸投げになっていないかの問い

○教育の内容を視覚化していく

○学科目標の下位目標を作っている

・社会人としての目標を足す方向で動いている

○主体的に動けない学生が増えている

・高校卒業したての学生の多さ

→確認テスト（ここまで学ばなければいけないという自覚を促す）

→しかし、その思いと裏腹に再試者が増え、再試で受かればいいという流れもある

→さらに考えなければいけない状況も出ている

○地域の中で作業療法士が活躍できるように学校ではどのようなことを行っていけばいいのかということについては今後検討

小檜山 : 学生の動機付けをどういう風にしていけばいいのか？

三沢 : 再試料は取られていない？

再試料を取られているのであればそれなりに重いのでは？

小檜山 : 学生のときは成績もよくなかった。

ついていくのが大変だった

志等はなかったか？実習に行って少し見えてきたものもあった

上松 : 所定の単位をこなしていくことが目的化していく

小檜山 : 学生の頃、現場で焦った感じはあった

上松 : 学生の頃は年齢も重ねていたこともあってか徹底的に勉強していた

三沢 : 勉強はしてた気もするが、訳のわかんない授業もあった。

しかし、教えている人がすごい人だという思いはあり、ついて行った

「作業療法士ってすごいな」というものを教員を通して見ていた

生の作業療法士（実習地）で学ぶことも多かった

上松 : すごい先生は迫力がある

こういうもんなんだなと思える存在

一方で生徒もやる気があるのでそれなりに聞いていた

三沢 : そこに至るまでの学力も関係するので一概には言えない

本当に学力がない人はそうそういない

圧倒的に考えることをしていない

わかんないことをわかんないと言えない人もいる

上松 : 経験してないということは言える

本腰入れればそこそこいける感じもある

やってない、経験してないからわからないという場合もあるかもしれない

膨大なことを暗記しろと言われた時に経験がないから太刀打ちできない

OTのカリキュラムも教えていかなければいけないから、記憶だけに時間は費やせない

小檜山 : 連携の話

他部門と話すこともある

企業の組織の中での連携に長けた方に来ていただいて、社会での連携について学ぶ機会もあってもいいのではないかな？

医療業界じゃない分野から呼んでもいいのではないだろうか

授業を行うタイミングも必要かもしれない

上松 : 模擬的にやってみる時間を設けることも必要かもしれない

小檜山 : 実習前とか記憶に残っているタイミングがいいかな？

上松 : 連携をとる上では、個々の実力があることが前提

小檜山 : 事前の打ち合わせが必要になる

医療の現状を伝えていく（現場が少しでも想像できる授業）

上松 : 報連相ができない・・・そういうレベル

三沢 : 職場でもある

小檜山 : 1年目の人と一緒にやっているが、連絡はない・・・

三沢 : 上司に相談する場面

上司からのアドバイスに対して報告がない

枠組みを作っていく必要があるのか？→トレーニングをするために

人によって枠を外す場合もある

上松 : 報連相が少ない人には仕掛けを作っている

三沢 : こうやるといいんだな・・・という仕掛けも意識している

小檜山 : 様々なシチュエーションがある。。。

上松 : 学生には学習してほしい

学習に重きがあったためこのようなことは、今までは大目に見ていた節もあった。これからはもう少しきちんとやるべきなのか。

しっかり枠を作って、練習する機会を作らなければならないのかと思っている

三沢 : 報連相において得になることを意識できればいい
これらがあることで自然に身についてくる
最低限のルールを設定していけばいい

一般の企業においても同じような性質を持った若者がいる
様々な方法論を持っているのではないか

小檜山 : 円滑に気持ちよく稼働している組織はあるはず

上松 : 自分で考える
授業自体の構成を考えていく
自分で調べないと成り立たないような授業でもいいのではないか
そこで褒められることで行動が変わっていくかもしれない

三沢 : やってきた学生が褒められるだけ

上松 : 認知行動療法をやろうと言ったことで手を挙げた学生がいる

小檜山 : 興味を引き出すのは難しい

上松 : アプローチは持ち札がないとやりにくい
アプローチ方法を探そう！という声かけ
評価実習について準備が必要と思っている
投げかけたところクラスに浸透しそうな雰囲気はある

三沢 : OT協会のニュースを編集していた頃
あの頃学生は実技の練習をしていた記憶が有る

上松 : 主に夜間部の学生がやっていた

部会報告

作業療法学科

○今の学生について

教員を通してOT像を見ていたという話
今は自分で考えるという経験をしていない

○連携についての取り組み

企業で教えている人もいる
連携について学ばなければいけない

○報連相について

連携の前に職場内部においても報連相が出来ていないこともある
枠を作って対応している

学科内でもやったらどうか

○授業形態について

自分で調べて授業に臨むような形態にできないか
そうすることで褒められる機会にもなる

介護福祉科

○障害領域に対する授業

ほぼ全員の学生が実習でいくようになった
就職にもつながっている（増えている）
しかし枠としては狭いのも現実・・・ただ理解の必要性は考えている
→学習支援での関わり

○地域包括ケアに対して学校が考えられること

居宅への実習先

利用者が了解しない
断られることが多い
見学だけ？2日間？少しずつ幅を広げていきたい
望月さん

様々なグループを作っている（オカリナ・・・）

介護福祉士がコーディネーターとして役割を持てるのではない
か？

→今後の教育システムによる

学生の質も考えなくてはいけない

学習支援をもう少し生かしていきたい。

→その後科目に入れていくのか検討していきたい

以上